美術科

多胡　慎平

主題「意図に応じて自分の主題を追求することができる生徒」の育成

１　主題設定の理由

昨年度は、「豊かに発想し構想を深め、自らの主題を追求し表現する生徒」を育成することを目指して研究を行った。生徒たちは、互いのアイデアを共有して検討し合う「構想検討タイム」の中で、ICT を活用して自分とは異なる感性から学び合うことで、自分の構想に活用し、「豊かに発想し構想を深める」生徒の育成へとつながった。課題として、「アイデアをどのように実現したらよいか分からない」と諦めて安易な表現方法で終わらせてしまい、自分の主題の追求が続かない生徒の姿が見られたことがあげられる。これは、生徒が様々な表現技法を学習してもそれを自分の表現にどのように取り入れたらよいか分からなかったり、自分が想定していたアイデアと実際の制作に違いが生まれてしまったりすることが原因ではないかと考える。

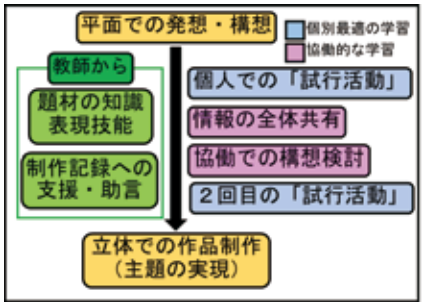
そこで今年度は、本制作と同じ材料を使って試行錯誤する「試行活動」の時間を充実させることで、生徒が学習した技能や表現方法に関する知識を実際に試すことができるようにしたい。さらに、発想したアイデアを基に実際にどのようにすれば表現できるか「試行活動」することで、生徒が実感を伴いながら発想や構想に生かすことができるようにつなげたい。

表現方法や技能に関する知識を深め、絵の具や材料などを使って「試行活動」を行い、生徒同士で得た情報を共有する手立てを設け、アイデアが実現可能か検討することで、「意図に応じて自分の主題を追求することができる生徒」の育成を目指していきたい。

２　「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるための具体的な手立て

○「試行活動」をする中で得られた情報を共有し、自分の表現に生かせる時間の充実

生徒が自分の主題を最後まで追求することができるようにするためには、「表す」（制作活動）段階に入るまでの「試す・広げる」（発想・構想）段階で、自らの主題が実現可能かある程度の見通しをもつことができるように、「試行活動」の時間を充実させる必要があると考える。個人での「試行活動」を実践するだけでなく、そこで得られた情報を全体で共有し、アイデアの実現につなげられる時間と内容を充実させるようにする。題材や表現技法に関する基本的な知識を学んだ後、生徒は個人での「試行活動」を行い、それぞれが得た表現技法に関する情報を全体で共有する。それによってより多くの情報が得られ、活動が苦手な生徒への支援にもつながると考える。２回目の「試行活動」ではグループで向かい合うような学習環境にすることで、生徒が互いの様子を観察し、学び合うための交流が自然に生まれるようにする。さらに、教師は生徒が「試行活動」する中で支援・助言を行いつつ、生徒がクラウド上に保存した制作記録から生徒の困り感を読み取り、それに合わせた支援や助言も行っていく。このように、「試行活動」をする中で表れた課題をどう解決するか協働的に検討し、それぞれが改善していくことで構想の実現性を高め、生徒が見通しをもって制作活動へ移り、自分の主題を最後まで追求することができると考える。



＜図１　「試行活動」の過程＞

＜季節感のある暮らしを楽しむ＞

＜使用したアプリ等＞
ロイロノート
カメラ

一体的な充実に向けた手立て

○「試行活動」をする中で得られた情報を共有し、自分の表現に生かせる時間の充実

＜本時の目標＞（１０時間中の３～５時間目）
自分の主題をもとに表現方法を試行錯誤し、得た情報を共有して構想を再検討することで、見通しをもちながら主題の表現方法を追求することができる。

実際の材料を使った「試行活動」を行う。

＜学習活動＞
・アイデアスケッチをもとに、色や形など粘土の表現について「試行活動」を行う。
・「試行活動」から得られた情報を写真と共に記録する。

「試行活動」で得た情報や成果を記録する

個 実際に材料を用いて絵の具の混ぜ方や材料の加工の仕方など試行錯誤した結果を記録することで、実感を伴った構想の改善や作品の制作につなげることができるようにする。
また、「試行活動」の成果を、写真を用いながら記録しておくことで、授業の期間が空いても自分の活動を思い出し、連続した思考を保つことができるようにする。そして、材料の乾燥や時間経過による変化を比較することで、次の制作でどのようにすればよいか生かすことができるようにする。

得られた情報を共有し、2回目の「試行活動」を行う。

＜学習活動＞
・「試行活動」で得た情報を、グループで話し合ったあと、全体で共有する。
・共有後、グループの形にまとまり、交流しながら2回目の「試行活動」を行う。

個人とグループで表現方法について「試行活動」を行う

協 「試行活動」で得られた材料の加工に関する情報をグループ内や全体で共有することで、気をつけるべき基本的な情報を全員が理解できるようにする。
個 共有した材料の加工に関する情報をもとに、材料の「試行活動」を再度行うことで、前回よりも、よりアイデアスケッチの表現に近づけるようする。
協 グループの生徒の「試行活動」の結果を確認し、互いに声を掛け合いながら試行錯誤することで、協力して課題を解決することができるようにする。

「試行活動」の結果から、自分のアイデアを再検討する。

＜学習活動＞
・「試行活動」で得られた情報を、再度グループや全体で共有する。
・自分の主題を表現する見通しをもつために、どのような表現方法や技法が活用できるか再検討する。

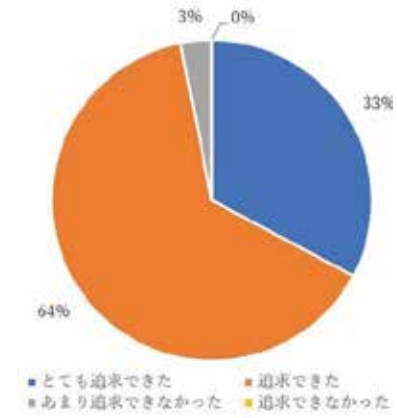
自分の主題を実現する方法を再検討する

協 試行錯誤で得られた情報をもとに、それぞれ主題を実現できるかグループで構想を再検討することで、完成までの見通しをもつことできるようにする。

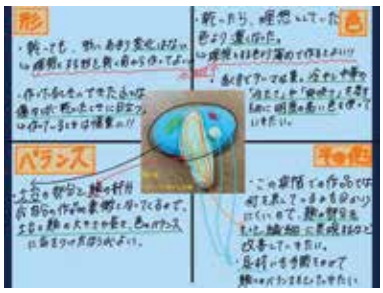
「試行活動」によって主題と表現方法を往復し、得られた情報を共有しながら構想を検討し合うことで、生徒は制作の見通しをもち、自分の主題表現する方法を追求しながら制作活動に臨むことができるようになった。

３　成果と課題

成果として、「試行活動」の時間を実践したことにより、自分の主題を最後まで追求することができたか生徒にアンケート調査を行ったところ、97％の生徒が「とても追求できた」「追求できた」と回答した（図２）。このことから、「試行活動」の時間の充実によって生徒は自分のアイデアが実現可能か見通しをもつことができ、「意図に応じて自分の主題を追求することができる生徒」の育成に有効であったと考えられる。生徒が自分の「試行活動」で得られた成果をそれぞれまとめ（図３）、「初めて使う樹脂粘土の特徴を知ることができた。」「どれくらい絵の具を混ぜれば理想の色をつくることができるか分かった。」「乾燥して固まる前と後の違いを比較することができた。」などの気づきがあり、生徒は試行錯誤の中で材料の特徴や、色や形の表現に関する知識や技法について学ぶことができていた。また、平面であるアイデアスケッチと立体作品の表現の違いについて気付いた生徒がいたり、友達のアイデアなどを参考にして最適なアイデアを生み出したりすることができた生徒もいた。さらに、「試行活動」によってアイデアの確実性が生まれたことで、生徒が自らの意図した主題に関するアイデアに集中し、別の安易なアイデアに方向を変えることを防ぐことができたのではないかと考える。ただしそれは、別のアイデアを生み出すことを否定するのではなく、別のアイデアの可能性を検討することで、よりよい発想や構想へをすることへと繋がる可能性も秘めていることを忘れしないようにしなければならない。



＜図２　アンケート調査の結果＞



＜図３　「試行活動」の成果＞

課題としては、生徒の「試行活動」の時間に関する意見として「試行錯誤によって制作時間が減ってしまった。」というものがあり、題材全体の時間から「試行活動」に関する時間の割合を増やしたことにより、実際の制作時間が減ってしまうことに不安を感じる生徒もいた。また、「試行活動」を実践する際は、常に何のためにしているのか、目的を明確にした上で生徒に臨ませる臨む必要があると考える。

４　今後の展望

作品の制作活動に移る前の個人の「試行活動」や、そこで得られた情報を生徒どうしが互いに共有し合う場を設定することで、生徒は自分のアイデアの実現性を高め、自分の主題を最後まで追求して表現できるようになってきている。「試行活動」をするための時間を確保するため、ICT を効果的に活用して必要な時間を確保しつつ、今後も本年度の研究を継続していきたい。

＜参考文献＞

群馬県教育委員会（2019）『はばたく群馬の指導プランⅡ』
三澤　一実・田中 真二朗他（2021）『美術の授業のつくりかた』武蔵野美術大学出版局
文部科学省（2018）『中学校学習指導要領解説　美術編』　学校図書